

研究ノート

大阪キャバレー史の手がかり

——熊谷奉文の『大阪社交業界戦前史』、『不死鳥の如く——大阪社交業界戦後史』を読む

櫻井 悟史

はじめに——キャバレーという謎

第1章 大阪キャバレー史に関する史料の解説

第1節 キャバレーの定義

第2節 熊谷奉文とは誰か

第2章 『大阪社交業界戦前史』を読む

第1節 キャバレーという呼称について

第2節 「キャバレー王」・榎本正

第3節 指名制の誕生——キャバレー「丸玉」社長・木下彌三郎

第3章 『不死鳥の如く——大阪社交業界戦後史』を読む

第1節 進駐軍キャバレー、邦人向けキャバレー

第2節 アルサロがキャバレー業界にもたらしたもの

第3節 キャバレー「ハワイ」とピンクサロン

おわりに——大阪キャバレー史の歴史叙述に向けて

はじめに——キャバレーという謎

カフェーやダンスホールの研究には一定の蓄積がある一方で、キャバレー研究はあまり進んでいない現状がある。正確にいえば、キャバレーへの言及自体は多くある。たとえば、斎藤光の京都カフェ研究では、1929年を開店したキャバレーを自称する「カフェー祇園会館」が取り上げられている（斎藤 2020: 142-143）。詳しい言及はないが、写真が掲載されているカフェ赤玉はキャバレーでもあったし（斎藤 2020: 140）、ミス大阪（斎藤 2020: 124）は現在も営業しているキャバレーの戦前の姿もある。他には、野口孝一

がカフェー経営者として詳細に検討している榎本正は、キャバレー王と呼ばれた人物である（野口 2018: 132-135）。このように、カフェー研究の中にキャバレーは登場するものの、カフェーとキャバレーは何が違うのか、キャバレーとは一体何かといったことが主眼に据えられることはない。他方で、ダンスホール研究では、キャバレーとダンスホールの複雑な関係が検討されている。永井良和は、戦後ダンスホールがキャバレーに吸収されていったことを明らかにしている（永井 1991: 182-194）。加えて、1959 年の風俗営業取締法の大改正によって、キャバレーが第 1 号営業に、ダンスホールが第 4 号営業に分けられることになったが、このときすでにキャバレーとダンスホールの融合は進んでいたため、キャバレー・ダンスホール業界は大混乱に陥ったという（永井 2015: 104-112）。これらの事実は、キャバレー研究にとって、極めて重要なことである。しかし、1960 年代以降のキャバレーがどうなったのかについては必ずしも明らかではない。

ここで本稿の関心の所在について確認する。カフェーやダンスホールの研究がキャバレーを中心には据えていないのは、キャバレー自身に関心があるわけではないのだから当然のことである。永井は、大阪毎日新聞記者で生涯を「社会悪」と「人間苦」の報告に捧げた村嶋歸之が『歓楽の王宮』の冒頭に掲載した「筆を擱くに当たつて」から、「カフェーの研究は、恐らくは、第三者から「際物」として受取られるだらう。それでも構はない」（津金澤・土屋編 2004: 225）という箇所を引用したうえで、「この気概に、私も共感する」（永井 2024: 354）としている。加えて、「ダンスホールの研究をはじめたのは四〇年ほど前、大学院生のころだ。たしかにこのテーマは「際物」扱いだった。投げださずにつづけることができたのは、調査で出あった多くの人たちのおかげだと思う」（永井 2024: 354-355）と、永井は自身のダンスホール研究について振り返っている。本稿で扱うキャバレーもまた、「際物」である。2025 年現在、スナック研究やキャバクラ研究は徐々に蓄積されつつあるが、キャバレー研究はほとんど蓄積されていないことが、「際物」であることを物語っている。それでは、こうした「際物」を研究するのは、一体なぜなのか。キャバレーの歴史を叙述するにあたって、筆者の関心の所在を明らかにしておくことは重要であると考えるため、以下に記しておく。

そもそも筆者がキャバレーに興味をもった理由は、2007 年に大阪千日前の「ユニバース」（2011 年閉店）というキャバレーを訪れたことにあった。当時、キャバレーとキャバクラの違いも分からずに踏み出したその世界は、煌びやかな照明で文字通り燐然と輝いていた。テーブルは数人単位で分かれているが、分断されている感じではなく、かといってまとまっているわけでもない。中心には大きなステージがあり、ビッグバンドによる生演奏やショーが催されているが、全員がそれに集中しているわけでもない。みな一つの場所で、おもいおもいに、楽しみたいように楽しんでいる。そこには不思議な開放感があった。筆者は身分を偽ってあることないことをホステスに話した。そうした嘘は間違ひなく見抜かれていたが、いつもとは違う自分になったようで、それも夢のような時間の演出に一役買

っていた。キャバクラと違ってホステスの平均年齢は高めであった。だからこそというべきか、キャバレーのホステスの話はとても面白かった。もちろん、それも虚実織り交ぜた話であったとは思うが、どこから嘘でどこから本当かということは、どうでもよいことであった。ステージではストリップショーも催された。隣についてくれたホステスが、「ストリップダンサーはセックスをしないの、体の線が崩れるから」と、少し誇らしげに教えてくれた。これが、キャバレーとの最初の邂逅であった。このユニバースという場所をどう言語化すればよいのだろうか、どういった経緯でこうした場所が形成されたのだろうか。それが、キャバレーについての最初の問い合わせ、筆者の根底にある関心の所在である。

もう一つ、印象的なエピソードを挙げる。2018年、日本のキャバレーの代名詞ともいえる「ハリウッド」の最後の店舗が閉店することになった。筆者は、その最終日あたりに「ハリウッド」を訪れ、ホステスに「ハリウッド」の経営者であった福富太郎について質問してみたことがある。すると、ホステスはパッと顔を輝かせて、「太郎ちゃんのことね」といって、楽しそうに思い出話を聞かせてくれた。特に覚えているのは、「ハリウッド」が託児所を備えていたことで、そのおかげで子どもがいても働けたという話であった。後で新聞を調べてみると、「ハリウッド」は、少なくとも1970年代には、すでに託児所を備えていたらしいことがわかった(『朝日新聞』1975.1.7朝刊)¹。1975年7月に刊行された『季刊藝能東西』第2号には、社会心理研究所の坂田稔なる人物が実施したキャバレーの実態についての調査結果が掲載されている。調査対象のホステスの数は121名と少なく、そこで行なわれた調査を一般化することは難しい。しかし、坂田の認識と考察には興味深い点がある。1975年前後、キャバレー・クラブ・バーなどで働くホステスの合計数は、200万とも300万とも言っていた。坂田が行なった調査では、調査対象のホステスの半数ほどが扶養者をもつ女性であり、かつ幅広い年齢層の分布を形成していた。そうしたことから坂田は、キャバレーが1975年当時の女性達の社会保障的役割を担う施設であったのではないかと述べている(坂田 1975: 245-246)。また、『キャバレー、ダンスホール20世紀の夜』(今井・奥川・西村 2018)という、キャバレーの写真集を企画・編集した西村依莉は、「白いばら」というキャバレーでホステスをしていたメンバーによって作られた同人誌『キャバレーは今も昔も青春のキャンパス』の中の座談会で、「たとえばDV夫から逃げてきた女性が働くようなシェルターともなっていた」(郷里の娘 2018b: 33)とも指摘している。もちろん、キャバレーにはピンからキリまであったため、別の側面もあった。しかし、こうしたいくつかの声や、「ハリウッド」に託児所があったという事実から、女性にとってキャバレーとはどういう働き場所であったのかということにも関心をもった。

¹ 記事によれば、横浜市神奈川区合町にあったキャバレー「ハリウッド」女子従業員の託児所兼独身寮「南海荘」が火事になったとのことであった。この託児所は、キャバレー自体に備え付けられた託児所というわけではなかったようである。

「ハリウッド」や「白いばら」²が閉店したこと、2025年現在の日本のキャバレーは数えるほどしかなくなってしまった。今となっては「昭和の遺物」のように扱われるキャバレーであるが、かつては、圧倒的な経済パフォーマンスを発揮していた業態であった。キャバレー業界の人間が書いた自伝（たとえば中田 1955）を紐解けば、その巻頭には自民党の幹事長や元大蔵大臣といった政財界の重鎮が写真入りで並んでいる。元首相の岸信介や皇室の人間が客として訪れるキャバレーもあった。こうしたキャバレーがなぜ衰退することになったのか。その衰退は、日本社会にとっていかなる意味をもつのか。以上のような関心から、筆者はキャバレーについての史料を集め出した。

それでは、次に、なぜ大阪のキャバレーの歴史について本稿で取り上げるのかについて述べる。これまでのキャバレー研究は、東京中心に行なわれてきた。日本のキャバレーについての研究で欠かすことのできないのが、福富太郎（本名、中村勇志智）の『昭和キャバレー秘史』である。福富は、先述した「ハリウッド」というキャバレー・チェーンを東京中心に展開して業界の頂点にまでのぼりつめた、キャバレー王とも称される人物である。その福富が自ら著した同書には、キャバレーのルーツとされる明治期のカフェーから、昭和の終わりである1988年に至るまでのキャバレーの歴史が綴られている。ここでは、カフェーとキャバレーの歴史をつなげることで、戦前と戦後が連続していることが示唆されている。同書の巻末に付されているキャバレー史年表は、2004年の「文庫版あとがき」で、「年表などは確認した結果、間違いはありません。また、間違って伝えられていたと思われるところは真偽の程を調べ直しました」（福富 2004: 296）と念押されているように、非常に確度が高く、かつ内容も充実したものとなっており、キャバレー研究を進めるうえでの最重要史料と位置づけられる。しかし、2点ほど検討の余地がある点がある。1つは、カフェーからキャバレーへの流れが自明のように書かれているが、カフェーとキャバレーを安易に同一視してしまってもよいのかという点である。換言すれば、カフェーとキャバレーの歴史の連続性についての叙述が不十分であると考えられる。もう1つは、福富が「私の経験と資料および情報の制約から、内容が東京中心になったことをお断りしておかなければならない」（福富 2004: 20）と注意を促しているように、同書は東京中心のキャバレー史であり、関西、特に大阪のキャバレーの歴史は部分的にしか記されていない点である。これは、何が問題であるのか。本稿で主に取り上げる熊谷奉文は、次のように述べている。「東京と大阪の東西両業界は、わが国社交業界の代表的な存在であり、それは車の両輪に等しい」（熊谷 1983: 283）。熊谷のいう社交業界は、キャバレー業界とほぼ重なっている。

² 「白いばら」の閉店の発表から最終日に至るまでの様子については、郷里の娘（2018a: 30-32）に詳しい。非常に貴重なレポートである。

つまり、キャバレーの歴史を叙述するためには、東京に注目するだけでは不十分であり³、関西⁴、特に大阪のキャバレーの歴史も踏まえる必要があるということである。

大阪という地域のキャバレー史を明らかにすることは、東京と大阪の相互作用によって形成してきた日本キャバレー業界の歴史の全体像を描くうえで欠くべからざる作業といえる。それゆえ、本稿では、特に大阪のキャバレーに焦点を当てることとした。ただし、本稿によって大阪キャバレー史の全貌が明らかになるわけでは全くない。あくまで本稿は、熊谷奉文の『大阪社交業界戦前史』、および『不死鳥の如く——大阪社交業界戦後史』を読み解くことで、大阪キャバレー史の手がかりを提示することを目的とした研究ノートにすぎない。

第1章 大阪キャバレー史に関する史料の解説

第1節 キャバレーの定義

史料の紹介に入る前に、カフェやキャバレーの定義について確認しておきたい。斎藤によれば、カフェは「洋風の内装調度の店内で、洋風の飲食、たとえばコーヒーや洋酒、カレーライスなどの洋食をとる場」(斎藤 2020: 23) として、1911年頃から日本でも一般的に知られるようになった。実際、大阪最初のカフェとされるカフェ「キサラギ」⁵の店内の様子は以下のようなものであった。

「カフェ・キサラギ」の看板は新しいが日本建の其頃、よく見かけた所在の洋食店と異なる表構へて、硝子戸を押して入ると、すぐ靴脱のタヽキ、板敷のガランとした室の中央にストーブだけが大きく、其のブリキの煙筒が天井を折曲がつて楣から外へ

³ キャバレー研究は、他にもいくつかあるものの（たとえば、松田[2015]など）、大阪のキャバレー研究はほとんどない。もちろん、東京のキャバレーについても研究の余地はまだまだあるため、東京のキャバレー研究はもう十分であるといったことを主張しているわけではないことは強調しておきたい。

⁴ 都築響一は、福岡県若松市（現北九州市）にあったベラミというキャバレーの当時を記録した写真集を刊行しているが（都築 2017）、現段階ではまだ個々の記録にとどまっており、ベラミからいかなるキャバレー史が描けるかが明らかになっているわけではない。

⁵ カフェ「キサラギ」の開店年月日には諸説ある。たとえば、熊谷は、1911年2月に開店したとしているが（熊谷 1981: 27）、村嶋は1910年説、福富は1908年説、寺川は1912年、遅くとも1913年説を唱えている。永井（2004）は、1910年説と1911年説を中心に、かなり詳細な検討を行なったが、決定的な史料を見つけることはできなかったとしている。細かい開店年月日が重要なのは、東京最初のカフェ「プランタン」が1911年の3月、または4月に開業したとされているためである（斎藤 2020: 26）。つまり、本当にカフェ「キサラギ」が1911年2月に開店したとすれば、カフェ文化が花開いたのは東京よりも大阪の方が早かったということになる。なお、コーヒーなどを提供する店としては、1888年の可否茶館がカフェよりも前にあった。

出てゐた。木卓に椅子が散亂してゐる處などは、今日でなら何所か片田舎の工場の食堂と云つた體裁で、川に向つた方には掛けがつて盆栽の幾鉢かゞ置きならべてあつた。(寺川 1933: 386)

このように当初は、大衆向けの洋食店といった趣のカフェであったが、カフェで働いていた女給が注目されはじめしたことから、カフェは「男性的空間」へと変容していく(齋藤 2020: 25)。そのため、『広辞苑』の第7版では、「明治末～昭和初期頃、女給が接待して主として洋酒類を供した飲食店。カフェ。カッフェ。」⁶と定義されている。接待とあるが、具体的には男性相手にお酒の酌や色気を用いたサービスを提供することを指している(熊谷 1981: 25)。それだけではなく、カフェにはダンスホールが併設されることもあった。ここで確認したような意味でのカフェという用語は、主に戦前に用いられたが、現在でも風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律(以下風営法)の中に残っている。

キャバレーも時代によって、あるいは人によって定義が異なっている。1948年風営法第1条では、第1号が「待合、料理店、カフェその他客席で客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業」、第2号が「キャバレー、ダンスホールその他設備を設けて客にダンスをさせる営業」とされていた。つまり、この時点では、カフェとキャバレーの違いはダンスがあるかないかの違いに求められた。ところが、1959年の風営法大改正によって、業種の区分が大きく変更された。具体的には、キャバレーとカフェの違いはダンスがあるかないか、キャバレーとナイトクラブの違いは接待があるかないか、キャバレーとダンスホールの違いは接待ならびに飲食があるかないかということになった⁷。これが2015年の大改正によって、キャバレーは「風俗営業」の第1号として、「キャバレー、待合、料理店、カフェその他設備を設けて客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業」と位置づけられていることとなった。ここでいう遊興とは、非常に曖昧な概念で、ダンス、演奏、ショーなども含みうるものとなっている(永井 2015: 255-256)。

こうした法律的な定義と人々が一般的に用いている定義は、必ずしも一致していない。2025年現在、「キャバ」というと、キャバレーよりキャバクラのイメージの方が強い。キャバクラの方が圧倒的に店舗数が多いからである。キャバクラが登場したのは1984年の

⁶ 『広辞苑 第7版』598ページ。

⁷ 1959年の風営法第1条では、第1号が「キャバレーその他設備を設けて客にダンスをさせ、かつ、客席で客の接待をして客に飲食をさせる営業」、第2号が「待合、料理店、カフェその他客席で客の接待をして客に遊興又は飲食をさせる営業(前号に該当する営業を除く)」、第3号が「ナイトクラブその他設備を設けて客にダンスをさせ、かつ、客に飲食をさせる営業(第1号に該当する営業を除く)」、第4号が「ダンスホールその他設備を設けて客にダンスをさせる営業(第1号又は前号に該当する営業を除く)」とされた。

ことで⁸、創始者は新富宏⁹という元キャバレー「ハワイ」グループの社員であった。キャバクラは、当初キャバレー7割、クラブ3割として売り込まれた業態だった。このことについて、新富は、『十人十色』なる雑誌のインタビューに答えている。そのインタビューは以下のようにまとめられている。

男はスケベである。そういった女性を創造するのも男が悪い。銀座のクラブのママも鼻についている。男を斜視でながめ、左うちわで稼ぎまくっているではないか。経営者と客も狂っている。こんな社会が長続きするはずがない。彼が憤を感じて考へついたのが「キャバクラ」だ。

明朗会計プラスお色気、女性のプロとしての感覚にプラスする品格、これを二で割ったのば^{ママ}キャバクラだ。キャバレーの雰囲気が70%、クラブのムードが30%、彼がこのキャバクラなる新語を世に発表すると、あっという間にマスコミが飛びつき、現代マスコミ用語辞典にも載り、いろいろなアイデア賞を受賞することになる。日本全国にキャバクラブームが爆発的となり、1年目に約300店舗、2年目に600店舗の物マネ店が続出することになるわけだ。彼は、キャバクラブームが頂点に達したとき、今度は雰囲気はクラブそっくり、そして飲み代だけはキャバレー並というニュークラブの発想を実現する。これが現在盛業中の新宿「蘭○」である。(松本 1991: 111-112、下線引用者)

ここで示されている「キャバレーの雰囲気が70%」という含意がいかなるものであるかは定かではない。しかし、1985年にキャバクラが流行語大賞になって以降、キャバレーという業態は後景に退き、現在もいたるところに店舗があるキャバクラが大阪を含めた社交業界を席巻することになった。キャバクラは疑似恋愛の要素が強い業態である。たしかにキャバレーにもそうした要素がないわけではない。実際、筆者が訪れたことのある、今はなき某キャバレーでは、キャバクラ的な接待が行なわれていた。だが、キャバレーとキ

⁸ 1985年の『週刊大衆』に掲載された「ブームの“キャバクラ”潜入ルポ」と題した無署名記事によれば、名前自体は1981年頃からあったという。ただ、最初のキャバクラがオープンしたのは、1984年の5月であったと記されている。

⁹ 『十人十色』に掲載された新富へのインタビュー記事によれば、新富は福岡県八幡市の生まれ。東京神田のYMCAホテル学校を卒業したあと、東京中野の駅前にピザパイ店「ビッグ・ホリデー」をオープンする。しかし、共同経営者に売上などを持ち逃げされ、店をたたむことになり、ヒルトンホテルの社員、中野の酒場のバーテンダーなどを転々とすることになるが、その後ハワイグループに入社する。1973年に26歳で18軒の店舗の社長代行になると、27歳で200軒、28歳で1000軒の店を任せられるようになる。しかし、その後、人事問題で悩みノイローゼとなって帰郷。「生長の家」に通いつつ、静養となる。復帰後、キャバレー「ハワイ」チェーン創業者の小松崎栄より池袋の「ハワイ」の店舗を4億円で譲り受け、それを元手に株式会社レジャラースを立ち上げた(松本 1991)。

キャバクラは別物である。少なくとも、キャバレー業界では、キャバクラをキャバレーとして扱うことはなかった。後に紹介する、キャバレーも含まれる料飲社交業界の専門紙『料飲社交新聞』にキャバクラの文字が登場しないことからも、それは明らかである。

それでは、正統派キャバレーとはいかなるものであるか。福富太郎の『昭和キャバレー秘史』から確認しておく。

キャバレーというのは、風俗営業取締法にあるように、正式にはお客様とホステスが踊れる踊り場がなくてはいけない。だから、小さな店ではキャバレーの許可はおりない。十組が正式なダンスをぶつかり合わずに踊れるためには、踊り場はかなり広くなければならず、少なくとも二十～三十坪は必要になる。また、ダンスをするためにバンドも入れるので、バンドステージもつくらなければならない。さらにショーもできるという社交場が、キャバレーといわれる所以である。

踊り場もなく、バンドもなく、音楽をテープでやっているところは、すべてサロンの許可しかおりない。したがって、キャバレーというのは、世間一般が考えているほど日本には多くない。ホステスがいてサービスする店はすべてキャバレーかというと、そうではないのである。(福富 2004: 17-18、下線引用者)

つまり、福富によれば、キャバレーに必要なのは、まず十分な広さである¹⁰。音楽演奏やショーやダンスは、キャバレーにとって必須のものであるからだ。これらの点が、キャバクラとの決定的な違いとしてある。キャバクラでの社交の形は接待を中心であり、それも主に一対一の疑似恋愛の形をとるため、キャバレーよりも社交の幅が狭い。福富は、サロンという業態を挙げているが、キャバクラはそちらに近い。サロンについては、ピンクサロンという性的サービスを提供する場所もあるが、これはまたさらに別物である。ただし、ピンクサロンとキャバレーは、一時期あまり区別がつけられなくなっていた時期があった。

¹⁰ この点について、本稿の査読で、風営法の施行規則を根拠に、広さというよりも客席の5分の1以上の踊り場が必要であることがポイントで、それによって福富はキャバレーとキャバクラの違いを説明しようとしているのではないかとのご指摘をいただいた。たしかにそのようにも解釈できる。ただ、ここで福富は「キャバレー」と「サロン」の違いを強調している。熊谷は「ミニ・サロン業界」(熊谷 1983: 199)——「ミニ・サロン」自体は当時使われていたというより、後になって出来た用語であるらしい(熊谷 1983: 197)——の代表として、キャバレー「ハワイ」を名指ししている。つまり、キャバレー「ハワイ」はそれまでのキャバレーに比べて小さいことが特徴であったと考えられる。このことと、戦後の超大型キャバレー時代のことと鑑みれば、キャバクラとの違いというより、「ミニ・サロン」でありながらキャバレーを名乗っている店舗、あるいは一般の人々によってキャバレーと誤解されている店舗に福富は憤りを感じており、それとの違いを強調したかったのではないだろうか。そこから、福富にとって、踊り場の広さは客席の5分の1以上ありさえすればよいという以上の意味を持っていたのではないかと考えため、本文の記述は修正しないままとした。ただ、この点は改めて検討したい点である。

ピンクサロンとして、福富が名指して批判するのが、先述したキャバレー「ハワイ」であった。

キャバレー「ハワイ」チェーンの創設者は、日本一成と名乗った小松崎栄という人物である。キャバレー「ハワイ」の前身は、浅草の「満月」という「おさわりバー」であった（福富 2004: 224）。福富は、キャバレー「ハワイ」をピンクサロン、エロサービスに特化したサロンと位置づけ、そういう業態はキャバレーとは呼ばないときっぱり否定している（福富 2004: 224-229）¹¹。しかし、料飲社交業界にとって、キャバレー「ハワイ」が無視できない存在であったのは、たしかな事実である。たとえば、鏑木恵喜は1976年に出版した料飲社交業界の歴史について記した本の「人物往来」という箇所で、当時、30代後半の年齢であった小松崎を取り上げている。鏑木が小松崎を取り上げたのは、彼が経営する「ハワイ」チェーンが日本料理、飲食、ホテル関係で売上げ日本一となったからに他ならない（鏑木 1976: 296）。

こうした「ハワイ」チェーンやキャバクラの台頭もあいまって、キャバレーについてのイメージは錯綜しているといってよい。本稿では、キャバレーの典型を福富のイメージするものと据えたうえで、そうしたキャバレーとの異同に注意しつつ、史料を読み解いていきたい。

第2節 熊谷奉文とは誰か

大阪キャバレー史が書かれてこなかった主な理由として、史料の不足が挙げられる。ただし、大阪キャバレーについてのまとまった記述がないわけではない。熊谷奉文の『大阪社交業界戦前史』（以下『戦前史』）と、『不死鳥の如く——大阪社交業界戦後史』（以下『戦後史』）は、まさに大阪版の『昭和キャバレー秘史』と呼ぶべき内容となっている。しかし、タイトルにキャバレーと入っていないためか、これらの本がキャバレー研究で正面から扱われることはほとんどなかった。そもそも、これらの本は国立国会図書館に所蔵されておらず、『戦前史』が大阪府立中之島図書館と大阪市立図書館に、『戦後史』が大阪市立図書館にのみ所蔵されている。そのため、これらの本の存在が一般にあまり認知されていないという事情もある。もっとも、カเฟー研究、ダンスホール研究では取り上げられることもしばしばあった。たとえば、永井は大阪のカเฟー「キサラギ」がいつ生れたのかを検討する際に、『戦前史』を取り上げている（永井 2004: 451-452）。筆者が『戦前史』に気づいたのも、永井（2004）を読んだからである。また、別の文献で、永井は熊谷の『戦

¹¹ もっとも、ピンクサロン的なキャバレーは「ハワイ」だけであったわけではない。たとえば、1976年の新聞記事では、チェーンキャバレー「ロンドン」がピンクサービスを行ない摘発されたことを「ピンクキャバレーを摘発」という見出しとともに紹介している（『朝日新聞』1976.2.20 朝刊）。

前史』における大正時代から昭和はじめにかけてのことについては、村嶋に多くを負っていると指摘している（永井 2024: 353）。なお、斎藤が用いたカフエーの写真も『戦前史』からの引用である（斎藤 2020: 124,140）。『戦後史』については、風営法研究の中で取り上げられている。たとえば、永井は、「大阪でも、一九五〇年代の「アルサロ」全盛期を経て、大型キャバレーの時代が到来する。ミナミの「メトロ」や「ユニバース」、キタの「ワールド」などのネオンが好景気を象徴していた」（永井 2015: 112）という箇所を『戦後史』を参考に書いている。

それでは、熊谷奉文とはいったい何者なのか。熊谷の経歴は、国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている『満州紳士録 第4版』（中西編 1943: 990）や、『大衆人事録 第14版 外地・満支・海外篇』（谷 1943: 110）、そして熊谷自身が執筆したプロフィールから知ることができる（熊谷 1981: 12-3）。それらを総合すると、以下のようになる。熊谷奉文（本名、熊谷敏雄）は、1907年5月10日、京都府で生まれた。1929年に日本大学法学部を卒業した後、大阪毎日新聞、神戸又新新聞社、同系列の関西中央新聞社などで勤務した。このときの警察回りなどを通じて、熊谷は多くの業界人と知り合うようになった。その後、夕刊新聞の「カフエー欄」などを担当し、社交業界に親しみをもつようになったものの、1939年に満州日々新聞に招かれ渡満。満州日々新聞齊々哈爾支社長などを務めるうちに終戦をむかえ、1946年の秋に大阪へと帰ってきた。その後、1949年に『大阪社交タイムス』紙を創刊。以来、大阪のキャバレー業界、社交業界とともに人生を歩んでいくこととなった人物こそが、熊谷奉文こと熊谷敏雄である。

2025年現在、『大阪社交タイムス』の存在は確認できていない。プランゲ文庫に収められている『社交タイムス』と名付けられた新聞が、『大阪社交タイムス』の初期のころのものであろうことがわかっているのみである。プランゲ文庫の史料に付されている1949年1月14日の「新聞報告」によれば、「社交タイムス」社の所在地は大阪市南区東清水町（現中央区）となっている。編集長名は「熊谷敏雄」（クマガイ トシオ）である。熊谷の住所は尼崎市となっている。資本金は5万円で、個人営業であったようだ。発行回数は月2回、発行部数は2000部、1部10円（年300円）であった。配布方法は「業界組合ヲ通ジ会員ニ配布、小部数ヲ店頭販売ス」とあるように、基本的には会員にのみ配り、ごく少数部だけ一般市民の手に入ることもあったようである。印刷所は布施市にある元井印刷所であった。編集方針に「大阪料飲業界ノ明朗化及健全発達ヲ方針トス」とあるとおり、業界の活性化が企図されていた。『社交タイムス』第1号の紙面を見ると、1面の左上の部分に「THE SOCIAL TIMES 社交タイムス」¹²という題字があり、その下に「キャバレー・ダンスホール・社交喫茶新聞」と書かれている。そこから、「料飲業界」には、キャバレー業界も含まれていると見て、まず間違いないだろう。

1949年1月15日に刊行された『社交タイムス』には、各界の代表者からの言葉が掲

¹² 第4号で「SOCIAL」と改められる。

載されている。先頭で掲載されているのはミナミ警察署長の山瀬鶴夫の言葉である。山瀬は「社交タイムスも正しい立場から業界のよりよき指導紙であらん事を切望してやみません」(『社交タイムス』1949.1.15)と述べているとおり、『社交タイムス』を通じて法令の遵守を徹底したいと考えているようであった。次に掲載されているのはキャバレー有明の店主、萩原敏彰の言葉である。キャバレー有明については、後ほど紹介する。萩原は、熊谷の人となりについて、以下のように述べている。「同氏は古くより新聞人として業界にタッチされ業界の事情に精通される真面目な人であり、我が業界を深く愛される方で暫く満州の新聞界にありましたが、さきに引揚げられ、今回再び業界に関係される事になり、必ずや我等のよき指針として活躍されるものと期待している次第です」(『社交タイムス』1949.1.15)。ここから分かるように、熊谷は『社交タイムス』刊行以前から、業界に深く関係していた人物であった。もう一人、言葉を寄せている人物がいる。それが、日本社交タイムスの鏑木敬喜¹³である。1949年、『社交タイムス』と名のつく新聞はもう一つあり、そちらの編集長を務めているのが鏑木であった。「今回、大阪料飲界に我社の友紙として“社交タイムス”が誕生した事は喜びに堪えません」(『社交タイムス』1949.1.15)と鏑木が述べる通り、熊谷の『社交タイムス』は、鏑木の『社交タイムス』の姉妹紙として誕生したようである。鏑木は、大阪で出版文化は育ちにくい、その原因として関西人の文化的事業に対する無理解があるという噂を取りあげた上で、「東京料飲界では現在十紙が業者と密接な連繋のもとに活躍しております」(『社交タイムス』1949.1.15)と述べた後に、「どうか御地においても當局および業者の深い理解のもとに御紙が発展せられん事を望んで已みません」(『社交タイムス』1949.1.15)と締めくくっている。ここからは、東京の方が文化的に上位にあるというような大阪への見下しも読み取れる。実際、鏑木は「関西業界を視察して」と題する記事において、関西の社交係のレベルの低さをこきおろしている(『社交タイムス』1949.2)。

プランゲ文庫に収められている『社交タイムス』は1949年9月15日に刊行された12号までとなっている。その後の『大阪社交タイムス』については不明であるが、こうした業界紙を作成していた熊谷が後に執筆したのが、『戦前史』と、『戦後史』の2冊であった。この2冊には、これまで未知とされてきた大阪のキャバレーの歴史や、その周辺の風俗業界の歴史が1982年に至るまで記されている。1982年で終了しているのは、『戦後史』が出版されたのが1983年であるため、この年に何か象徴的な出来事が起こったからというわけではなさそうである。もちろん、「昭和」という時代を意識したわけでもない¹⁴。し

¹³ 鏑木がその後に出版した本では、鏑木恵喜となっている。しかし、1949年当時、鏑木が発行していた『社交タイムス』では、鏑木敬喜とある。本稿では、文脈に応じて漢字を使い分けている。

¹⁴ 福富(2004)は、もともと1994年に出版されたものを文庫化したものであるが、すでに平成の時代となっていたこと、タイトルに「昭和」が用いられていることから、「昭和」を意識して執筆されたものとみて間違いないだろう。

かし、1984 年のキャバクラの誕生が、キャバレーの歴史に大きな衝撃を与えることに鑑みれば、奇しくもというべきか、同書はちょうどその直前までの歴史となっている。

本の中身であるが、『戦前史』は、「開花篇」、「業界篇」、「女給篇」、「事件篇」、「よもやま篇」、「付録篇」の全 6 章で構成されている。「開花篇」をのぞいては、各地の状況や各人物の逸話などが、トピックごとに記されている。一方、『戦後史』は 1 年ごとに編年体形式で記述されており、前半でその年に起こった流れを、後半でその年のなかから特に重要なトピックを取り上げて解説を付すというスタイルをとっている¹⁵。

この 2 冊を扱ううえで注意しなければならないのは、熊谷がこれらを「大阪社交タイムスと自分の記憶で書いた」(熊谷 1983: 287) としている点である。本稿では、関連史料や先行研究を参照する形で、熊谷の記述の裏付けを取りつつ紹介したいと考えているが、まだまだファクトチェックが不十分な箇所が多々ある。それでも本稿で『戦前史』と『戦後史』を読み解くのは、不十分な形であっても、キャバレー研究にとってこれらの本が重要であるということを示すことで、キャバレー研究が活性化し、さらに多角的なチェックが可能になるのではないかと考えたからである。

第 2 章 『大阪社交業界戦前史』を読む

本章では、熊谷の『戦前史』をキャバレー史の視点から読み解いていく。『戦前史』は大阪カフエー史としても読むことができるが、大阪のカフエー史については、すでに一定の蓄積がある(山路 2023; 永井 2024)。そのため、ここでは特にキャバレーに関連する箇所を取り上げて検討していく。当時の熊谷は、大阪キャバレー戦前史を、明治初期から大正初期にかけての創成期、大正中期から昭和初期の開花期または搖籃期、それ以後の爛熟期の 3 期にわけて記している。本稿でも、おおむねこの時代区分にのっとった整理を試みる。

第 1 節 キャバレーという呼称について

大阪で最初に「キャバレー」の名を冠したのは、1911 年末に開業した道頓堀中座前の「旗のバー(キャバレッ・ド・パノン Cabaret de Panon)¹⁶」であった(熊谷 1981: 28)。熊谷によれば、「キャバレッ・ド・パノン」は「旗のバー」の別名であるとのことである。

¹⁵ これは福富の『昭和キャバレー秘史』が章の前半に「客観的」な歴史を記述し、後半に自伝を掲載するというスタイルと似ている。

¹⁶ 「キャバレッ・ヅ・パノン」や「キャバレーゾ・パノン」といった表記もある。

中田政三によれば、「旗の酒場」（「旗のバー」と同一の店）が道頓堀にまずあって、その後、戎橋の南詰に移転した際に、同店を「キャバレッ・ド・パノン」と呼ぶようになったという（中田 1955: 164）¹⁷。

熊谷は、パノンについて、「これが大阪業界で初めてキャバレーの名を使った店とされているが、現在と違い、物運びの女給仕が立ったままでお酌と話相手くらいはしたというから、今のカフェーにやや近いものだったようである」（熊谷 1981: 28）と記している。なお、パノンについては山路（2023: 12-15）にも詳しい。

熊谷がいう「現在」的なキャバレーの用語はどこからきたのか。熊谷は、当時の「赤玉」企画宣伝部長の竹沢淳¹⁸によればと断ったうえで、キャバレーという呼称は榎本正が1931年の上海視察みやげとして持ち帰ったものだとしている（熊谷 1981: 26）¹⁹。1932年4月に開店した木下彌三郎の「丸玉」もキャバレーという名称を用いていたため²⁰、このあたりの時期から、大阪にキャバレーという言葉が定着しはじめたとみて間違いないだろう。なお、1927年4月開店の「空堀有明」の写真にも CABARET の文字が読み取れるが、この「空堀有明」は1936年までに改築増築を4回実施しているようであるため、おそらくキャバレーという呼称が広まったのちにつけたのだろうと考えられる（歓楽街評論編集部 XYZ 生 1936: 46）。

¹⁷ 中田政三は「フランスバー」経営者であり、大阪商工会議所のカเฟー撲滅運動などの際に社交業界を強力に擁護した人物である。中田は「我が国の観光事業篇」と題する回顧録を遺している。この回顧録は、1955年に刊行された中田の著書『酒・煙草・珈琲』に収録されているが、当初は『日本キャバレー三十年史』というタイトルで独立して出版される予定だった。1954年の『日本社交タイムス』199、200、201、203号には、中田が『日本キャバレー三十年史』を出版する予定であることが宣伝されていたのと同時に、同書に収録予定のトピックの概要も掲載されていた。しかし、その後、『日本キャバレー三十年史』という単体の本は刊行されず、別のエッセイ等とあわせて『酒・煙草・珈琲』という本が編まれることになったようである。このように推測する理由は、「我が国の観光事業篇」と、『日本キャバレー三十年史』の概要の文章がほとんど同一のものであったことによる。『酒・煙草・珈琲』の巻頭には、寿屋（サントリーの旧社名）社長である鳥井信治郎、元アサヒビール会社社長・通産大臣の高橋龍太郎、元大蔵大臣の泉山三六と並んで、万国觀光株式会社・キャバレーメトロ取締役会長にして「キャバレー王」と呼ばれた榎本正が推薦文を寄せている。中田もまた、京阪神貿易觀光協会理事長という肩書きを持っていた。つまり、榎本や中田の肩書きからもわかるとおり、当時キャバレーと觀光という単語は密接に結びついていたのである。なお、ここでの「觀光」という単語の意味は、現在の「觀光」とはやや異なっている。いずれにせよ、中田の「我が国の観光事業篇」は、大阪キャバレーの歴史を知るにあたって、非常に重要な史料と位置づけることができる。

¹⁸ 「竹沢氏は戦前戦後を通じて五十余年間、よき大番頭として榎本チェーンを支えた人物で死後、業界従業員として初の叙勲（勲六等旭日単光章）者となった」（熊谷 1981: 56）。

¹⁹ 福富は、特に出典などなく、「大箱のカเฟーが自ら“キャバレー”と呼称し始めたのは昭和七年である」（福富 2004: 30）としている。なお、大宅壮一文庫の目録検索で「キャバレー」を検索すると最初に出てくるのが、1936年の米村耿二の「上海キャバレ秘話——國際娘行状記」である。

²⁰ 福富では、「赤玉」の開店が1932年となっている（福富 2004: 30）。

熊谷は、さらに重要な指摘を行なっている。「だがキャバレーとカフェーに法的な区別があったわけではなく、大箱の近代的な店が好んでキャバレーを呼称したに過ぎず、小箱店はずっとカフェーの名を使っていた」(熊谷 1981: 26)。つまり、カフェーであるか、キャバレーであるかは、店の規模の大小によって、好みから決定されていたに過ぎず、明確な区分があるわけではなかった。ここからわかることは、カフェーとキャバレーが重なりあってのこと、さらにいえばカフェーの一形態がキャバレーと名付けられたであろうことである。つまり、全てのカフェーがキャバレーであるわけではなく、キャバレーではないカフェーもあった。後年、福富は、キャバレーを店の規模によって定義づけているが、そこにはこうした歴史的背景もあったと推察される。

中田は、大阪キャバレー史のはじまりを以下のように記している。

旗の酒場は、その後五十万円の株式組織で戎橋の南詰に旗の酒場を仏蘭西読みにキャバレー・ド・パノンと名宣つてキャバレー時代に駆けたが、内容これに伴はず一年にして倒れその跡をユニオン（小堀勝蔵氏）が譲り受けキャバレーユニオンとして、ユニオンビール（山本為三郎氏）とタイアップして華々しく開店した。これが大阪に於けるキャバレーの元祖とも云ふべきであろう。（中田 1955: 164）。

熊谷も中田と同様の認識を示している。ただし、熊谷はユニオンをカフェーと記し、このカフェー業を本格化させたのが榎本正だったとすることで、大カフェーの歴史をキャバレー史へとゆるやかに接続している。熊谷は、ユニオンの経営者である小堀勝蔵を「大阪キャバレー業界の先駆者というべき人」(熊谷 1981: 50) と位置付けている。小堀は、青年期をアメリカで過ごし、1921年ごろに此花区四貫島で西洋料理店「アサヒ屋」を開店、そこから「カフェー・ユニオン」を経て、キャバレー・ユニオンへと至ったという（熊谷 1981: 50-51）。

熊谷によれば、「ユニオン」がそれまでのカフェーと違うのは、第一に業界初の本格的な支配人を雇った点にある。その代表的な人物が第3章でも登場する森本耐三である。小堀は、三越百貨店の食品部にいた森本を招聘し、「ユニオン」の支配人をつけた。関西大学卒で外国語にも秀でていた森本は、「ユニオン」閉店後、キャバレー「丸玉」の営業部長に就任し、戦後もキャバレー業界、バーテンダー業界で活躍することになる。第二に、女給のシンボルであったエプロンを廃し、接客業としての女給の職業的地位を確立したことが挙げられる。これがキャバレーの元祖とされる所以である。第三に、始業時あるいは終業後に進行なわれる毎日の点呼を発案した点が挙げられる。発案者は森本であるという。RAA企画部出身で、『社交資料新聞』を作るなどしたキャバレー研究家を名乗る安部は、ホステス講座の最初のトピックとして点呼を取り上げているが（安部 1967）、それぐらい点呼はどのキャバレーでも見られる慣習として、戦後にも定着した。その発祥の地こそが「ユニオ

ン」であるとされている。以上のような点から、小堀率いる「ユニオン」を、大阪キャバレー史の先駆けであると位置付けることができる（熊谷 1981: 50-52）。

第2節 「キャバレー王」・榎本正

小堀の「ユニオン」によって生まれた流れを発展させたのが、「赤玉チェーン」総帥の榎本正であった。熊谷は、福富はじめ多くのキャバレー王がいた1981年時点にあっても、榎本正こそが日本のキャバレー王であると断言している。なお、福富が登場する前の1955年時点における中田も、榎本を「キャバレー界の王者」（中田 1955: 156）と位置付けていた。ゆえに、榎本への評価は、熊谷の個人的見解というより、業界的な評価であったとみてよいだろう。熊谷は榎本をキャバレー王と呼ぶ理由を、以下のように述べている。「私が榎本氏をあえて今も「キャバレー王」と呼ぶのは、同氏がすでに事業の多様化傾向の強かった中で、ひたすら飲食業一筋に徹したことにある。この榎本イズムは現在も矢追宗次メトロ社長と、東京の酒井トシ子赤坂ロイヤル社長＝メトロ会長＝によって盛業のうちに脈々と生き続けている」（熊谷 1981: 56）。引用からも分かるように、熊谷はキャバレーの本質を飲食業と捉えていた。それゆえ、熊谷は『戦前史』を執筆したであろう1980年前後のキャバレーについて以下のような憤りを示している。

カフェーが西洋料理店、食堂、レストランから生まれたことを示すものとして、後年大キャバレーとなった店も当初は『赤玉食堂』『ユニオン食堂』『有明食堂』といずれも「食堂」を冠していた。従ってカフェーは酒類と並んで料理が主要な商品で、メニューはお造り、各種鍋物、小鉢ものといった和風料理から西洋料理一切と多彩を極めていた。「カフェーへ食事に行こう」といったのもこのころのことである。戦争の激化につれて食料事情が悪くなって料理数は少なくなったけれど、それでも今のようなお粗末なメニューではなかった。これは終戦直後の苦しい食糧事情の後遺症であろうが、食糧が豊富になった現在も、オカキの突出しにカマボコ、オデン、タコ焼とはどうしたことであろう。名はキャバレー、カフェーであっても、その本質は飽くまで飲食業であることを忘れないで欲しいものである。（熊谷 1981: 26-27）

それでは、当時のキャバレーの料理とは、どのようなものであったのか。熊谷も名を挙げている「有明食堂」ことキャバレー「有明」について見てみたい。『歓楽街評論』は1936年に「有明十周年記念號」を刊行している。そこにキャバレー「有明」のメニュー表が掲載されているのである。それによれば、定食がA(200円)、B(150円)、C(100円)の3種類、それに加えて有明ランチ(60円)というランチメニューまであったようだ。他には、30円でオードヴール、コンソメ、ポタージュが、35円で牛肉カツレツ、ビーフステ

ーキ、ミンチボール、オムレット、ポテトフライ、チキンライス、ハム・ビーフライスが、40円でテリヤキ、チキンカツレツ、チキンコール、コールチキン、コールビーフ、ソセージサラダ、野菜取合せサラダ、メキシコサラダ、ハムサラダ、ハムエッグス、ポークチャップ、サンドイッチ（野菜・ハム）、カツサンドイッチ、エビライス、有明ライス、鮮魚フライ、海老フライが、50円でチキンまたはハチーズサンドイッチ、チーズ（クラツカ一附）、サーデンサンドイッチが、70円で有明スペシャルビーフステーキが食べられたとのことである（無署名 1936: 106-107）。メニューを一瞥すると、たしかに食べ物にも力が入れられていたことがわかる。このなかにあるカツサンドイッチは、筆者が行ったことのあるキャバレーでも名物として提供されていたが、この頃の時代の名残であったのかもしれない。さらに、先ほどのメニューの最後には、「其他お見計料理如何様にもご調理申上ます」と書き添えられていることからもわかるとおり、キャバレーで調理もしていたのである。

熊谷によれば、榎本は奈良県で代々旅館業を営む家系に生まれた。1925年末、北区天神橋筋五丁目に「赤玉日本料理部」を開業、1926年5月にはカフェー「天五赤玉食堂」を開業、これがのちの「赤玉」チェーンへつながっていくこととなる。1927年5月、道頓堀中座東隣に「南地赤玉」を開業、同年12月に同店を太左衛門橋南西北角に移転し、「道頓堀赤玉」とした。「道頓堀赤玉」は、約350坪の面積をもつ、地下1階、地上2階の建物であり、シンボルであるネオンの大風車が約30メートルの塔の上で回転していたという（熊谷 1981: 52-53）。当時にあって、圧倒的に巨大かつ目立つ建築物だったであろうことは、想像に難くない。以上から分かるように、榎本は大阪キャバレー史のみならず、日本キャバレー史を語るうえで、欠かすことのできない人物である²¹。榎本については、野口（2018: 132-135）も詳しい。

第3節 指名制の誕生——キャバレー「丸玉」社長・木下彌三郎

昭和初期のミナミには、「赤玉」（太左衛門橋南詰）、「ユニオン」（道頓堀）、「美人座」（戎橋北詰）、「日輪」（戎橋北詰西）、「高橋」（心斎橋南詰）という五大キャバレーがあった（熊

谷 1981: 43）。その激戦区に参戦したのが、1932年開業のキャバレー「丸玉」であった。そして、この「丸玉」と榎本の「赤玉」が、大阪キャバレー業界の覇権をめぐって争うこととなった。熊谷は、そのときの様子を以下のように熱を帯びた文章で綴っている。

²¹ なお、弟の榎本明三は、大阪時代に営業部長として活躍、のちに東京の業界でリーダー的存在となった人物で、「ダンスホール王」（増田 1949）と称された人物である。鏑木の『戦前戦後社交（料飲）史』の「人物往来」という章では、東京キャバレー業界の著名人が多数取り上げられているが、そこにあるのは榎本明三の名前のみである。

「赤玉」と「マルタマ」の古豪、新鋭が相打つ激闘は今も古い業界人の語り草になっているが、この両店の斬新にして奇抜しかも大胆な企画と宣伝戦が、全市業界に与えた刺激は大きく、それがそのまま大阪社交業界発展の大きな原動力になった。(熊谷 1981: 43-44)

熊谷も参照している木下の自伝『奔馬の一生』から、木下のプロフィールを確認したい。「丸玉」の社長、木下彌三郎は滋賀県生まれで、呉服商、製パン業からキャバレー業界に入るという異色の経験の持ち主であった。この「丸玉」が産み出したとされる、2025年現在の風俗業界にまで残されているシステムがある。それが、自分の気に入った相手を指名して、接客してもらうシステム、いわゆる指名制である。木下によれば、当時、女給の収入はチップだけであった。そのため、店の売り上げではなく自身のチップの獲得に奔走する女給と、店の売り上げを出そうとする店側の思惑が交錯した結果、客が多大な料金を支払うこととなり、店から離れていた。それによって、多くのカフェー、キャバレーが潰れてしまうといった事態が出来ていた(木下 1976: 48)。そこで木下が考え出したのが、チップの料金を明確化し²²、徹底的に管理するという方法であった(熊谷 1981: 58)。同時に客の注文を全て伝票に記入することで、客側はどのくらいの料金がかかるのか把握しながら遊ぶことができるようになった。「世にこれを限定サービス料制度(ボルネシステム)といったが、この商法が成功したと見ると他店も競ってこの制度を採用した。現在使われている指名制度は、この時に生まれたのである」(熊谷 1981: 58)と、熊谷は述べている。木下も「木下流・マルタマ商法は忽ち東西に波及し、一ヶ月後には大阪の赤玉が同じシステムを打ち出し、東京の銀座でも一円チップ制が定着して斜陽化していたカフェー業界が急に息を吹き返したのである」(木下 1976: 52)と、当時を振り返っている。これらの歴史叙述については、木下の自伝が根拠となっているため、ある程度割り引いて考える必要があるだろう。キャバレー業界以外に似たシステムがあった可能性もある。とはいえ、2025年現在にも残るキャバレーの指名制度の歴史を考えるうえで、木下の証言や熊谷の叙述は大きな手掛かりとなるであろうことは間違いない。

²² 熊谷(1981: 58)では、『奔馬の一生』を要約する形で、「本番1円、番外(応援)50銭、指名2円」と記されている。しかし、木下の自伝では、本番、番外、指名といった言葉は使われていない「ホステスのチップを一円、アシスタントには五十銭というサービス料を明示」(木下 1976: 50)しただけ書いている。おそらく、後に広まった木下のシステムと、木下の自伝の記述が混在しているのではないかと思われる。

第3章 『不死鳥の如く——大阪社交業界戦後史』を読む

本章では、熊谷の『戦後史』をキャバレー史の視点から読み解いていく。戦前と戦後の間に空いてしまっているが、この間の動向は熊谷の文献からだけでは読み解けないと判断し、あえて空白とした。大阪のカフェー・キャバレーの大半は、大空襲によって灰燼に帰した。それでは、カフェー・キャバレーはどのようにして復興したのか。

第1節 進駐軍キャバレー、邦人向けキャバレー

戦後の大阪キャバレー史は、「進駐軍（占領下）キャバレー」（熊谷 1983: 16）にはじまる。熊谷によれば、1945年8月18日、「内務省警備局長名」²³で性的慰安施設、飲食施設、娯楽施設設置の指示が出ると、当時の大阪府知事田中光太郎は、まず松竹演芸の白井信太郎に協力を要請した。その白井は、「赤玉」の総務部長だった田村新一郎と知り合いだったため、田村に協力を依頼。田村は、戦前の「赤玉」関係者へと協力を呼びかけ、進駐軍キャバレー1号「歌舞伎」を大阪市南区難波新地に建設することになった。ここは元歌舞伎座跡で、後に千日前デパートとなった場所である（田村 1975: 343）。「歌舞伎」は、1946年9月27日に開店した（熊谷 1983: 18）。

進駐軍キャバレー2号は心斎橋筋南詰の「インターナショナルクラブ」であった。これを経営したのは池田善一郎なる人物であったが、池田はキャバレー経営とは無縁であったため、相談役として布施にあったカフェー「巴里」を経営者していた西田弥三郎、元「赤玉」宣伝企画部長の竹沢淳、元「丸玉」営業部長森本耐三、さらに小浪グループで活躍していた岩井春を置いていた（熊谷 1983: 16-19）。

進駐軍キャバレー3号「富士」は、榎本正（社長）や中野政太郎（取締役）——現在のニュージャパン観光株式会社の土台を築いた人物。戦前はキャバレー「日乃丸」を経営——や矢追宗次（資材部長）——のちのメトロ社長——など、錚々たるメンバーが揃っていたが、建物を進駐軍のPXに接収されるなどしたため、すぐになくなってしまった（熊谷 1983: 19-20）。

こうした進駐軍キャバレーの寿命は、非常に短いものであった。熊谷は、『大阪・焼跡闇市』に掲載された、田村の回想を5ページに渡って引用している。田村によれば、1950年に朝鮮戦争が勃発すると、兵士たちは、みないなくなったという（田村 1975: 347）。RAAは1949年5月に解散したので、おそらく実際に朝鮮戦争と進駐軍キャバレーの寿命が関係しているわけではないだろう。ただ、1952年にサンフランシスコ講和条約が発効されるころには、邦人向けキャバレーに転向するか、あるいは廃業することになったことと（熊

²³ 正しくは警保局長である。

谷 1983: 23)、朝鮮戦争の軍需ブームによって邦人向けキャバレーが息を吹き返したことから（熊谷 1983: 54）、田村はこのように回想したのかもしれない。

進駐軍キャバレーの歩みと邦人向けキャバレーの歩みは異なっている。1945年10月24日、決戦非常措置令によって閉鎖されていた邦人向けカフェ・キャバレーの営業の再開が許可された。復興の先頭にたったのは、のちにドウトンビル社長となった田中清一郎であった。田中は、1946年10月1日、榎本正から譲り受けた道頓堀の「グランドパレス」あとに「赤玉会館」を開業した。ここに戦前からの元女給や元芸妓が集まり、ヤミ市で儲けたヤミ成金がやってきて、盛況を博した（熊谷 1983: 33-35）。これを機に多くのカフェ・キャバレーが復興していくことになる。

しかし、1947年に「飲食店営業緊急措置令」（7・5政令）や「建築物制限令」——1店の坪数は15坪まで——が出されると、業界は一気に冷え込むことになった。特に7・5政令では、酒類の販売を禁止されたため、ケーキやコーヒーで接待するスタイルでの営業を余儀なくされることになった。そこから生まれたのが、「社交喫茶」なる名称のカフェであった。ただ、「社交喫茶」では、表向きはコーヒー、紅茶、ソーダ水による接客が行なわれたが、裏では客からの持ち込みということで怪しげな酒が氾濫することになった（熊谷 1983: 40）。「社交喫茶」ができたもう一つの理由としては、カフェ・キャバレー閉店にともなう女性失業者救済の側面があったと熊谷は記している（熊谷 1983: 42）²⁴。

1949年5月7日に「飲食営業等臨時規制法」が公布され、7・5政令は事実上廃止されたものの、まだまだ厳しい制限があった。1950年には、建築制限も解除され、朝鮮戦争の特需が発生すると、キャバレー業界は「超大型キャバレー」時代に突入する。「超大型キャバレー」とは、どの程度の大きさだったのか。1950年12月15日に開業した「超弩級」キャバレー「メトロポリタン」（榎本正・矢追宗次）の詳細について、熊谷は以下のように記している。

公称一千坪、円型フロアからドーム型の天井までの高さ 20 メートル、それを取り巻く階段式客席七百、ここに働くホステス、ダンサーは千人といわれた。近代的構想を駆使したステージ、設備の絢爛豪華さは、キャバレーの新時代到来を思わせた。さらに踊り子百余名からなる専属メトロダンシングチームが、毎夜展開する豪華ショウは、わが国一と称するメトロバンドの演奏と共に、その名は世界に拡り、連夜超満員の客で賑わった。（熊谷 1983: 223）

²⁴ このあたりの年代から喫茶店は三つに分類されることとなる。すなわち、社交喫茶、甘喫茶——純喫茶、ミルクホール、しる粉屋、今川焼などが一体となったもの——、特殊喫茶——遊郭で働いていた娼妓がいる喫茶店——である（熊谷 1983: 42）。

1948年に開店した「二世メトロ」(一世は戦前のメトロ)は、地坪400坪、地下1階、地上2階300席というものだったそうで、当時はこれでも驚かれたが、単純計算で2.5倍の大きさを誇ったのが、1950年に開店した「メトロ」であった(熊谷 1983: 222)。

1953年に開店した、「メトロ」の西約100メートルの地点に建てられたという超大箱キャバレー第2号の「富士」(田中禄春)は、何坪かは不明であるが、地階ダンスホール、地上1、2階キャバレーの客席は700席を備える規模のキャバレーであった(熊谷 1983: 224)。

超大型店第3号は、1956年に開場した「ユニバース」であった。「ユニバース」について、以下のように記されている。

志井氏[志井銀次郎]はこの道では全くの素人だが、生来のアイデアマンで、このあとあらゆるところにそれが生かされるが、地上五階の大建築物も、あとで述べるステージも、すべて同氏の設計、建設監督によるもので、全くの自家製建築である。六八〇坪のダンスホールの豪華さもさることながら、日本調の庭園を思わず通路を経て入るキャバレーの豪華さ、とくに30尺の大天井はさながら満点の星空を思わせ、その天井から降下する五基の円型ステージ(空飛ぶ円盤)を配した専属ショウの絢爛さは人々の目を抜くのに充分であった。(熊谷 1983: 227-228、[]内補足引用者)

この「ユニバース」に迎えられたのが、森本耐三であった(熊谷 1983: 228)。森本は、本稿でも何度も名前が登場している、「ユニオン」の支配人だった人物である。

「ユニバース」のあとも、以上のキャバレーよりは少し規模の小さい「クイン」(矢追宗次)、「ニュージャパン」(中野幸雄)、「ミス大阪」(杉村光造)、「サン」(大草勇)といったキャバレーが10年ほどの間に次々に乱立していくことになった。

特筆すべきは、朝鮮戦争の軍需ブームを背景に、社用族と呼ばれる人々が生まれた点にある。つまり、会社の金で飲み食いしたり、接待したりする人々のことであるが、熊谷によれば、この社用族によって高級とされる盛り場、特に曾根崎新地業界が活性化することになった(熊谷 1983: 64)。ただし、大衆業界には大した影響がなかったという(熊谷 1983: 54)。

第2節 アルサロがキャバレー業界にもたらしたもの

戦後には、キャバレーの新しい業態も生まれた。それがアルバイトサロン、通称アルサロである。1950年8月に開業した田村新一郎の「ユメノクニ」がその元祖とされている。

田村は、進駐軍キャバレー1号店を作った人物でもある²⁵。アルバイトサロンとキャバレーの違いは、接客する女性にある。戦前から女給として働いていた人々を「玄人」、女子学生やOLを「素人」と位置づけ、後者を大量に雇い入れたのがアルバイトサロンである。もともとは、ビヤホールでビールを運んでもらうだけのつもりだったが、ユニホーム作りなどが衣料統制の関係でできなかったために、「それならいっそのことビール娘に客席サービスをさせては、ということになって生れたのがアルサロの原型である」(熊谷 1983: 78)。アルサロに応募する女性は多数いたが、採用にはいくつか条件があった。「学生は学校、OLは会社の在校または在社証明書と保護者の承諾書、それに学科試験に合格すること」(熊谷 1983: 80) がそれである。学科試験は、大学受験のようなものではなく、社会、映画、政治、芸術などについての口頭試験と人物考査が主であった。

アルサロがキャバレー業界にもたらしたのは、平均年齢の引き下げと、戦後から働くようになった新しいホステス達であった。このアルサロは 1950 年代前半にブームとなり、さまざまなキャバレーがアルサロへと転向していくこととなるが、そのブームは 1955 年をピークとする一過性のものであった。というのも、「素人」は経験がないから「素人」なのであって、何年か業界で働けば、必然的に「玄人」になっていくからである。つまり、アルサロで働くホステスの「プロ」化が生じたことにより、一気にアルサロブームは去ることになる²⁶。

もう一つ、アルサロがキャバレー業界にもたらした決定的に重要なことは、自由チップ制から日給制への移行であると、熊谷は指摘する。戦前から働いていた熟練のホステスは、日給制より自由チップ制の方が稼げるとして、当初は日給制に見向きもしなかったが、サービスに自信のないホステスにとっては日給制の方が魅力的であった。店にさえ出れば、給料が保障されるからである。ただ、これによって、接客サービスの質が落ちることになったという (熊谷 1983: 84)。

アルサロブームが去ったもう一つのきっかけは、1958 年の売春防止法の全面施行であった。これによって近畿地区で転業、廃業した女性は推定 5 万人といわれ、その多くがアルサロ・キャバレー業界へ流れることとなった。熊谷は、この事態がのちのキャバレーの過剰サービスの原因であるとしている (熊谷 1983: 107-109)。もっとも、1955 年前後から、「ムード喫茶」、「ヌード喫茶」といった「ピンク喫茶」の原点は登場していたようである (熊谷 1983: 111)。

²⁵ なお、進駐軍キャバレー1号店である「歌舞伎座」の4階には「婦人専用ダンスホール」なるものがあった。そこでは、アルバイト男性による男性ダンサー（パートナーと呼んでいた）が女性を接客していたという。熊谷は、このことについて「いま流行の男性ホストによる「女性の遊び場」が、このころもう出来ていたのである」と驚嘆している (熊谷 1983: 79)。

²⁶ ただしアルサロは、その後も生き延びていた。筆者は 2023 年に大阪府の十三にある「アルサロふうりゅう」を訪れたことがある。なお、「アルサロふうりゅう」は 2024 年に閉店した。

第3節 キャバレー「ハワイ」とピンクサロン

キャバレー史全体からいえば、料飲税問題、音楽著作使用料問題、公領制問題、深夜喫茶問題など、取り上げるべき問題はたくさんある。しかし、それらについては、キャバレー業界のみの話ではなく、他業界も含めた問題であるため、ここでは割愛したい。最後に取り上げたいのは、キャバレー「ハワイ」の台頭が大阪に与えた影響である。

1971年ごろの大阪キャバレー業界は、それまでの惰性によって続いていた(熊谷 1983: 197)。ところが、1972年7月29日、ミナミに「法善寺ハワイ」が進出したことにより、情勢に変化が訪れる。熊谷は、初めて「ハワイ」を訪れたときの感想を次のように記している。

それはまことにお粗末な店で、戦前にあった場末のカเฟーを見る思いであったが、このチェーンの店は、みな同じ規格のシステムであることは後で知った。あの耳をろうする音楽に合わせて、ミニスカートのホステスが踊り歌い、大胆なサービスで客をもてなしていた。値段は一見、安いようだが実際はそう安いものではなかったが、安く遊べるシステムではあった。(熊谷 1983: 197-198)

戦後のキャバレーは、これまで見てきた超大箱店に代表されるように、大規模な店がメインであった。しかし、キャバレー「ハワイ」は、のちにミニサロンと呼ばれるほど小さな店として登場した。この「ハワイ」チェーンが、1972年9月7日に「宗右衛門町ハワイ1号店」、同月14日に「千日前ハワイ」、同年10月25日に「八幡町ハワイ」と、次々に店舗を出していったのである(熊谷 1983: 198)。これは、大阪だけに限ったことではない。全国規模で「ハワイ」チェーンは急速に成長していった。そして、これがのちに大衆のキャバレーイメージをピンクサロン的なものに転換させることとなった。ただ、1972年当時は、まだ許せる程度のエロサービスであったらしい(熊谷 1983: 199)。しかし、「ハワイ」チェーンの成功が世に知れ渡ると、「ハワイ」と似たようなミニサロンが乱立するようになり競争も激化、それにともないサービスもどんどん過激なものとなっていき、多くの逮捕者が出来こととなった(熊谷 1983: 199-200)。「その最悪の店としてハワイがあげられたが、これは目立つものが受ける悲劇であろう」(熊谷 1983: 200)と熊谷が述べるように、キャバレーハワイ自体は、それほど過激なエロサービスを展開したわけではなかったようである(緒方 1976)。福富によれば、正確な年代は定かではないが、大阪のハワイでは代表取締役が警察に呼びつけられることがあったとのことで、そのあたりからエロサービスを控えるようになったのかもしれない(福富 2004: 228)。ただ、こうしたハワイからの流れによって「一般人にとってキャバレーといえばピンクサロンがイメージされるようになり、オーソドックスな業界人を嘆かせ」(福富 2004: 217)のことと

なった。

真善美研究所の三上玄一郎なる人物によれば、キャバレー「ハワイ」は、「安全明朗会計」、「スタンバイ制」、「団体プレイ」の三つの戦略を柱とするシステムを備えており、このシステムは、すでに「満月」の時代から確立されていたという（三上 1976: 41）。「安全明朗会計」とは、「時間制キャバレー」と呼ばれたように、10分刻みで料金が算出されるシステムのこと（三上 1976: 19）、「スタンバイ制」とは、一定時間で客に帰ってもらう制度のことを指す（三上 1976: 43）。すなわち、一時間前後で客を入れ替えるという回転率アップのための仕組みを「スタンバイ制」と呼んだ、とキャバレー「ハワイ」でホステスをしていたという緒方小夜子も証言している（緒方 1976: 38）。「団体プレイ」というのは、特定の女性の魅力に頼るのではなく、店としての魅力を打ち出すためのシステムである。キャバレー「ハワイ」では、ホステスという呼び名ではなく、女子社員という呼び名を使用していたことも、ここに起因していると推察される。この「団体プレイ」という点は、のちのキャバクラとの相違点として挙げられる。

キャバレー「ハワイ」の一号店は東京の蒲田にあったが、当初は小浪義明の「ミカド」（小浪 1966）や福富の「ハリウッド」のように大型店志向であった。しかし、大型店ではホステスをフル稼働させることが難しく、社員たちの教育を行き届かせることも困難であったことから、小型店志向になっていった。さらに小松崎は、以下を大型店の欠点とみなしたという。

それに、高いギャラを払って呼ぶバンドやショーを客自身が本当に楽しみ、それが来店動機にかかわっているかというと、はなはだ微妙であった。接待客や社用族の中高年管理職層を相手にしている店であれば、バンドやショーを取り入れたゴージャスなムードも必要かもしれない。しかし、ポケットマネーで遊ぶ若い層相手のハワイの場合はどうか。バンドやショーがホステスたちの気分転換、活性剤となって接客に好影響をおよぼすことはあっても、肝心の客にとっての必要性が曖昧であった。（三上 1976: 45）

こうしたことから、ビッグバンドやショーが不要なものとみなされ、そのために必要とされたスペースも必要ないとされることで、小型店舗化が進んでいくこととなった。これは、キャバレーの歴史からすると決定的な変化である。なぜなら、音楽を楽しむ、芸能を楽しむといったことがキャバレーから取り除かれることになったからである。そして、この「ハワイ」から登場したのが、キャバクラなのである。

おわりに——大阪キャバレー史の歴史叙述に向けて

ここまで、熊谷奉文の『戦前史』と『戦後史』を読みながら、大阪キャバレーの歴史の空白の一部を埋めてきた。『戦前史』と『戦後史』は、これまでカフェ研究やダンスホール研究の一部としてしか取り上げられて来なかった、大阪キャバレーの通史の見取り図を提示するものである。ほとんど手がかりのなかった大阪キャバレー史研究において、『戦前史』と『戦後史』が存在する意義は大きい。特に『戦後史』は、1950年代以降の大坂キャバレーの動向の概要をつかめるため、大阪カフェ研究を戦後にまで接続するための鍵となると考えられる。本稿では、穴だらけの断片を提示したにすぎないが、それでもカフェーから現在への道筋が薄っすらと浮かび上がったように思われる。

『戦前史』や『戦後史』の記述には疑問点も多い。特に本稿では意図的に排した花柳界、ダンスホール業界、スナック業界、音楽・芸能界などの周辺業界の記述には怪しい箇所がいくつもあるため、関連業界の史料や先行研究と合わせて用いる必要がある。それでもなお、『戦前史』や『戦後史』の大坂キャバレー史における有用性は非常に大きいと結論する。

付記：本稿はサントリー文化財団「若手研究者による社会と文化に関する個人研究助成（鳥井フェローシップ）」の研究成果の一部である。

《参考文献》

- 安部安春, 1967, 『0時の話題——キャバレー研究家の証言』久保書店.
- 福富太郎, 2004, 『昭和キャバレー秘史』文藝春秋.
- 今井晶子・奥川純一・西村依莉, 2018, 『キャバレー、ダンスホール 20世紀の夜』グラフィック社.
- 鏑木恵喜, 1976, 『戦前戦後社交（料飲）史』日本社交タイムズ社.
- 歓樂街評論社編集局 XYZ 生, 1936, 「キャバレー有明沿革史」『歓樂街評論』10(5月臨時号), 44-47.
- 木下彌三郎, 1976, 『奔馬の一生』出帆社.
- 郷里の娘, 2018a, 『キャバレーは今も昔も青春のキャンパス』郷里の娘.
- , 2018b, 『キャバレーは今も昔も青春のキャンパス 2』郷里の娘.
- 小浪義明, 1966, 『キャバレー太閤記』鶴書房.
- 熊谷奉文, 1981, 『大阪社交業界戦前史』大阪社交タイムス.
- , 1983, 『不死鳥のごとく——大阪社交業界戦後史』大阪社交タイムス.
- 増田信一郎, 1949, 「ダンスホール王榎本明三」『丸』2(5): 70-80.
- 松田さおり, 2015, 「【資料紹介】占領期の東京・銀座におけるキャバレー／ダンスホール」『Intelligence』15, 92-102.
- 松本亨, 1991, 「目標は年商100億。“キャバクラ”を生みだしたアイデアマンの次の一手」『十人十色』,

108-112.

- 三上玄一郎, 1976, 『群雄伝——ハワイ商法の秘密』真善美研究所.
- 村上勝彦, 2022, 『進駐軍向け特殊慰安所 RAA』ちくま新書.
- 無署名, 1936, 「有明 MENU」『歓楽街評論』10 (5月臨時号), 106-107.
- 永井良和, 1991, 『社交ダンスと日本人』晶文社.
- , 2004, 「解説——近代都市文化と「大阪カフェーの東征」」村嶋歸之『大正・昭和の風俗批評と社会探訪——村嶋歸之著作選集第1巻 カフェー考現学』柏書房, 445-460.
- , 2015, 『定本 風俗営業取締り——風営法と性・ダンス・カジノを規制するこの国のありかた』河出ブックス.
- , 2024, 『ゲイシャのドレス、キモノのダンサー——日本のタクシーダンス・ホール 大正・昭和戦前篇』ふみづき舎.
- 中西利八編, 1943, 『満州紳士録 第4版』満蒙資料協会.
- 中田政三, 1955, 『酒・煙草・珈琲』京阪神貿易観光協会.
- 野口孝一, 2018, 『銀座カフェー興亡史』平凡社.
- 緒方小夜子, 1976, 『女の目がみたキャバレー・ハワイ』東京経済.
- 斎藤光, 2020, 『幻の「カフェー」時代——夜の京都のモダニズム』淡交社.
- 坂田稔, 1975, 「おたずねしますホステスさん——キャバレー・ホステスの実態と意識」『藝能東西』螢夏号: 241-250.
- 田村新一郎, 1975, 「キャバレー「歌舞伎座」」大阪・焼跡闇市を記録する会『大阪・焼跡闇市』夏の書房, 342-347.
- 谷サカヨ, 1943, 『大衆人事録 第14版 外地・満支・海外篇』帝國秘密探偵社.
- 寺川信, 1933, 「大阪カフェ源流考——カフェを中心とした大正初頭の大正文藝運動」『上方』: 385-390.
- 津金澤聰廣・土屋礼子編, 2004, 『大正・昭和の風俗批評と社会探訪——村嶋歸之著作選集第1巻 カフェー考現学』柏書房.
- 都築響一, 2017, 『ROADSIDE LIBRARY vol.003 ベラミ——おんなのアルバム キャバレー・ベラミの踊り子たち』合同会社蛤.
- 山路勝彦, 2023, 『美人座物語——近代日本のカフェ文化と東アジア世界』関西学院大学出版会.

櫻井 悟史 (さくらい・さとし)

立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程修了。博士（学術）。立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員、サントリー文化財団鳥井フェローを経て、現在は滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科准教授。専門は、明治以降の日本の社会問題と娯楽文化、具体的には死刑（特に死刑執行人）や、キャバレーをはじめとした盛り場について研究している。sakurai1982@gmail.com（求むキャバレー情報）